



twitterで連載している小説のまとめ本3冊目です。1, 2冊目から読んでいただくとストーリーがよくわかると思います～～。

【連載61】 カリカリとした気持ちを鎮めるために、別のレストランで簡単に朝食をとり、コンシェルジュに頼むとすぐにスパの予約が取れた。トリートメントを3時間やってもらっているうちにチェックインの時間が来る。わたしはスパに向かう。

【連載62】 先ほどスパが終わり、チェックインしたところだ。スパでは驚いたことに、大きな窓から海が見渡せる明るい待合室でカルテを挟みながら施術者の女性と話をしていたら、蓉子が現れた。偶然なのかどうか尋ねる気になれない。同じくこのリゾートに宿泊する予定だという。

【連載63】 ほとんど同時に施術の終わったわたしたちは一緒にスパ施設から出る。わたしは軽くメイクをしてもらったが、蓉子は素顔のままだった。ここで蓉子が、本当に美しい容貌の持ち主だということに気がつき、嫉妬と同時にこのゲームの登場人物としての愛着を感じた。

【連載64】 蓉子が「今晚ご予定ありますか？」と聞いてきた。「いいえ、気ままな一人旅だもの」とわたし。予定調和の台本の台詞を合わせているみたいだ。「ネットで知り合った男性が、今日アットホームなパーティを催すんですって。お友達と一緒にどうぞって言われて」

【連載65】 「もし良かったら一緒に行ってくださいませんか」という蓉子をパーティに誘ったのは、果たして紫藤なのか？なんとなく蓉子に借りを作るような苦い気分が一瞬こみあげるが、すぐに消去する。「あら、喜んで。そういう華やかな場所に縁がない滞在だと思っていたから嬉しい」

【連載66】 そして今、わたしはチェックインした部屋に1人だ。荷物もほどかず、ベッドの上で接続したパソコンをせわしなくチェックしている。蓉子が指定したタワーのその階にはpentハウスしかないはずだった。蓉子と紫藤のログを読むがパーティについての記述はない。



【連載67】 twitterにはDMの機能があるのでログを読んでもパーティに誘った人間は判らないだろうと思いつつも、わたしは約束の時間の直前までパソコンから離れることができなかった。30分前になり慌ててドレスをまとって部屋を出る。ハワイには夜が降りてきている。

【連載68】 自分の滞在しているタワーを出ると芝生の庭はあちこちがキャンドルでライトアップされている。夕風に吹かれながらカクテルを手に行っている人も多くて、昼間より賑わっているくらいだ。奥のほうには海が静かに横たわっていた。風が乾いていて気持ちいい。

【連載69】 プルメリアの植わった遊歩道をおくるといい匂いがした。後ろから呼ばれて振り返ると蓉子だった。大輪の花をプリントしたハワイらしいドレスに身を包み、色白の肌は、今晚は少し濃いめに作られている。わたしは改めて自分の年齢や容貌を思い、ため息をつく。

【連載70】 道中ペントハウスでのパーティを主催するのは、アメリカの金持ちの老人だということが分かり、わたしは少々拍子抜けした。「アメリカン・ドリームの体現者みたいな人らしい」と蓉子ははしゃいでいた。彼女の目的はなんなのだろうか。

(8)

---

【連載71】ペントハウスに入室する際、ブラックタイの男に名札を渡された。なじみのある青い鳥が印刷されていた。「twitterネームをここに書いて胸につけるらしいわ」と蓉子に言われて虚を突かれたわたしは軽く咳き込んだ。一体なにが始まろうとしているのか？

【連載72】名前を書いた瞬間、ブラックタイの男はラップトップのキーを叩いた。参加者は全員主催者にフォローされて、一括して主催者のアカウントのパーティのリストに載ると告げられる。一体そのリストは誰に読まれるのか？全世界の目にさらされることになるのではないか。

【連載73】元々ウェブマガジンの読者を中心とするフォロワーに読んでもらう目的でわたしはツイートを重ねてきた。しかし、それはわたしがコントロールできる範囲の読者を想定するものだった。アメリカの富豪の主催するパーティの参加者としてさらされることは想定していなかった。

【連載74】入室するとオーシャンビューの巨大なフロアが広がっていた。ガラスの向こうには黒い海と、ダイヤモンドヘッドが見渡せた。シャンパンを手渡される。蓉子はすぐに人の輪に吸い込まれていった。わたしはクラッチバッグから携帯をそっと出す。

【連載75】周囲にもiPhoneを覗いている人間が何人かいるのでわたしも携帯を覗き込むことにためらわなくてすんだ。すぐにフォローしたという主催者をチェックする。巨大な会社を所有するという富豪の、今回のパーティのメンバーを登録したというリストをクリックする。





【連載76】果たしてわたしの予想は当たった。そしてそのことに安堵と緊張を感じる。紫藤もそのリストに含まれていた。金持ちのコミュニティは案外狭いのか、それとも紫藤はアメリカの財界に出入りしているのか、わたしは思いめぐらす。

【連載76】ふと、自分のアカウントが@つきになっているのを発見する。英語のツイートで、しかも主催者の発言だ。「パーティの参加者である作家のsummeryerのツイートをリアルタイムで英訳するアカウントを用意した。我らの作家に乾杯」、とある。

【連載77】その瞬間、わたしのフォロワーが一気に100人以上増えた。あまりに一瞬のことで目を疑った。そのあとも続々とフォロワーが増える。主催者のフォロワーがそのツイートを読み関心を持ったのだろう。英訳アカウントもすぐに1000人以上のフォロワーがついた。

【連載78】わたしは血の気が引いて携帯から顔を上げる。パーティ会場の人々の談笑が波の音のように心地よく響く。誰もわたしには関心を払っていない。ネットの中で起きていることと現実が乖離しすぎて眩暈がする。いや、乖離しているのかいっしょくたのか自分で判断できない。

【連載79】わたしは携帯をしまふととりあえずシャンパンの入った薄い硝子でできたグラスを持って、食べ物の並んだテーブルへ向かう。ハワイ料理をアレンジした色とりどりの料理が並ぶビュッフェがあった。緊張で食欲などなかったが手持ち無沙汰だった。

【連載80】混乱しているのでうまく料理を皿に盛る自信がないと思っていたら、ブラックタイの男がやってきて、すぐに料理を取り分けて手渡してくれる。それを持って、近くのテーブルまで行って空いている席を見つけて、座ってよいかと白人の女性に尋ねた。



(9)

【連載81】「もちろん…、あら、あなたが作家のゲストなの？ 美しい東洋人の女性だと噂されていたけど、ほんとおきれい」と白人女性に言われてわたしは驚く。「噂？」わたしは思わず聞き返す。「そうよ、twitterの他愛ないお喋りでのことよ」女性はにっこりほほえむ。

【連載82】テーブルに着席した人間に、その女性がわたしのことを紹介してくれた。皆礼儀正しくにっこりと迎え入れてくれる。わたしはシャンパンを一気に飲み干す。次はマイタイをいかがです？と1人の男性が言ってくれて、わたしはただただ頷くのだった。

【連載83】しばらく談笑の輪に加わっていた。わたしはそれほど英語に長けていないが、先ほどからひとりの男性の噂が繰り返られているのは理解できた。このパーティの主催者の老人の、息子だという人物についてだ。その御曹司がほどなく社長として就任するらしい。



【連載84】突然大きな音がした。窓の外に大輪の花火。そういえば金曜日の夜はこのリゾートでは花火が打ち上げられる。子どもが小さい頃は、毎年家族でここに訪れていた。あれから月日が流れた。相変わらず優しい夫はしかし、かなりの地位を得て、猛烈に忙しくなった。

【連載85】 やがて花火の音と光と陰にくっきりと輪郭をなぞられ一層その存在感を強めたような、がっしりした体躯の初老の男性が現れた。いやでも視界に入って目の離せなくなるような存在感だ。周囲の人々の恭しい態度から、この男性が今日のパーティの主催者だと見て取れた。

【連載86】 その初老の男性は東洋系の顔立ちをしているが、物腰はいかにもアメリカ人だった。ここからは聞き取れないが英語を話しているせいで顔の筋肉の動きが日本人やそのほかのアジア系の人種とは異なった雰囲気放つのだろうか。いやそれだけではない。

【連載87】 男性の挙動は隅から隅までよく訓練された上流階級のアメリカ人のそれだった。いかにも上流アメリカ人のイメージなのだが、そこまで完璧な人間は実際にはあり得ないくらいの幻想を、役者が見事に演じきっているといったような。

【連載88】 そして男性のかたわらに、わざわざ気配を消すようにして立っている男性がいて、それが紫藤だった。大袈裟ではない程度のフォーマルな装いをしているが、いかにもそれは抜け目なく、初めて成田エクスプレスで見たときに抱いた印象は間違っていなかったと思った。

【連載89】 人からどう見られるかという計算に長けている。しかも計算のうえでの慎みなのだと、いうことを自分の人格に組み入れてしまい、本来は別の顔を持つであろうプライベートな部分はしっかりと隠しているという意志を嫌みでないふうにごちらに伝える。

【連載90】 花火の間もテーブルのうわさ話は途切れることなくむしろ花火に匿われておおっぴらに続いていて、やはりその東洋人の男性がこのパーティの主催者の富豪であることがわかる。そして近々社長に就任するという息子が、紫藤のことだということも。